

中国医科大学生一行を迎えて

八島継男（会員）



はじめに

当協会は平成29年11月26日から12月2日の7日間、「日本・アジア青少年サイエンス交流事業（さくらサイエンスプラン）」の助成を受け、医学学生日中交流活動を実施した。

1. なぜ「中国医科大学」学生なのか？

筆者がこの大学に巡りあったのは1984年頃であった。当時筆者はJICAの初代の事務所長として北京に在勤していた時期で、フフホト行き列車の中で同じコンパートメントに乗り合わせたのが、瀋陽の中国医科大学の日本語で医学を教育しているグループの主任教授魏先生で

あった。教授は耳鼻科が専門で、その時は内蒙古医科大学博士課程の卒業予定者の口頭試問に行く旅の途次であった。筆者はかねてからJICAと関係の深い日中友好病院が医大の付属病院でないため、継続して医師が供給されるかという不安があった。この機会を逃す手はないと、教授との関係を強めるよい機会と思い、JICAの役割、友好病院のことなど詳しく説明し、将来的に協力することを確認した。さらに何か必要なものがあれば、またJICAの協力を得たい場合の手続きを指南したところ、教授は耳の生理試験機材がほしいとのことであった。その機材の供与は数年後実現した。その後、数年経って瀋陽に総領事館が開設され、それを記念する意味もあって、同大学内に「中日医学教育センター」（89年～94年）をJICAの技術協力事業として開

始し、その終了後、引き続き「中日医学教育センター臨床医学教育プロジェクト」（95年～2000年）を実施した。そしてこの10年間に多数の日本人専門家が現地に赴任し同大学の日本語で医学を教育するグループを支援した。これにかかわった日本の大学は慶應義塾大学医学部、九州大学医学部等が主な大学であった。筆者及び日本の医学界が戦後、中国医科大学に大々的にかかわったのはこのプロジェクトが最初であった。

2. 中国医科大学の設立の経緯

本大学は元の紅軍の主力が延安に移動した当時、延安で設立された紅軍の軍医大学が紅軍とともに転戦するに従い、延安から、東北に入り、瀋陽に到達したところで、そこに定着し、当時瀋陽にあっ

た英国系の盛京医科大学及び満州国時代に日本が設立した満州医科大学を統合して、中国医科大学を設立した。この過程から瀋陽に所在した医科大学にもかかわらず中国という冠称が付され、さらにそこに日本語による医学教育グループが開設されたことも理解できよう。この日本語による医学教育グループが存在したのは数年前に吉林大学の医学部として統合されたベチュン医科大学であったが、統合の際、それは消滅した。従って中国医科大学は現在日本語による医学教育を行っている中国唯一の医科大学である。ちなみに日本語以外でも英語による医学教育を行っているクラスは医科大学の多くの大学にある。その他フランス語、ドイツ語による医学教育を実施しているクラスを有する大学もある。これは次に述べる中国における医療の多様性が存在することに通じるのではなからうか。

3. 中国の医療の多様性

現在中国には五大医療ないしは医学が存在し、かつそれらは市民権を有している。即ち、それらは中医（俗に言う漢方医）、西医（この中に既に述べた米英、日本、ドイツ、フランス医学が含まれる）、



北京藏医院

モンゴル医、チベット医、ウイグル医である。この中にロシア医学がないことを奇異に感じるかもしれないが、ロシア医学については中国建国当初から、北京市の南にソ連の援助によって設立された友誼医院というのがある。これも北京では一流の病院に数えられ、評判の良い病院である。当時は東欧からも多くの専門家が中国に来て技術指導に携わっており、こうした専門家のための病院であったと思われる。ここは今では中国人にも開放され、評価を得ている。

その他、50以上はあるという少数民族にそれぞれの医学ないし医療が存在している。これらは必ずしも正式には認知されていないと言えないと思われる。しかし主流のいくつかの医学については例えば、フフホトには中蒙医院があるし、北京には立派な藏医院が存在するが、残念ながら筆者は北京の藏医院には入ったことがない。ただし、昔、青海省の西寧に旅行した際、タール寺院（ダライ・ラマに相對するパンチュン・ラマを頂点とするチベット仏教の本山）を訪れた時、案内役の僧侶から敷地内にある広大な建物を指して、あれが藏医の医学学校であると説明された。そこではラマ教に基礎を置いた医学を教育している。他方、蒙古医学については中蒙医院に日本政府が頭部のCTを供与した際、筆者が引渡し式に出席した折、院内を見学したが、その時の説明では蒙古医学は中国医学の系譜を引くもので、その間に大きな違いはなく、ただ、薬について鉱物系を多く用いていると説明され、その後これらの医学には余り深入りすることなく今日に及んでいる。この中蒙医院には戦中名古屋大学に留学した呉奇医師が学業半ばで終戦となり、フフホトに帰国し、その後、名古屋大学に復学し、日本の医師免許を取得。



フフホト市中蒙医院

そして再度フフホトに戻り、中蒙医院に勤務し、内モンゴルの人々の医療に尽くした。そしてJICAの対中国協力が開始されたことを機会に再度訪日し、その折にJICAからの機材を得ることができたのである。

4. 最近の中国医療事情

中国の最近の医療事情は前述の通り、多文化、多民族を反映して、日本などと

は異なった医療形態があるわけであるが、その中で大衆の生活水準の向上とともに医療水準に対する要求水準も上がってきている。それに応えるため、社会も政府も従来とは異なった対応をしてきており、例えば公立病院の外、私立病院も増加しており、健康保険も次第に都市から農村へと普及しつつある。しかし、そのレベルは高くなく、公立の病院は1、2、3級あるいは甲乙などに分けられており、3級の甲が最高レベルの病院である。

これ等病院の下に農村や地方都市の衛生所あるいはコミュニティの衛生センターがある。2016年時点でコミュニティの衛生センターは3万5000か所、ここ数年は毎年500か所前後増加している。公立・私立の病院のバランスを見ると、公立病院は大体2011年以来ほぼ1万3300か所で増えず、むしろ16年は前年より若干減少している。その反面、私立病院は毎年1000か所以上増加している。2015年には公立病院を1500か所ほど上回った。こうした数量が増加する半面、問題点も少なくない。

そのいくつかを上げると、患者が多いが患者が大病院に集中し、大病院は混むが、小病院は患者が少ない。こうした大病院と小病院のアンバランスが目立つ。これは分級診療がうまく機能していないからでもあるが、また患者が信頼できる大病院に集中するからであり、これは医療水準のアンバランスによる。一方には大病院の医師に過大な負担がかかり、その割には待遇が悪いため、医療従事者の流失が多い。他方、患者からの不満は診療を受ける機会を得るのが難しいとか、価格が高いとか、病院のシステムが理想的でない、とかがある。たまたま今回の訪中で家族が怪我し、友好病院を受診したが、外国人であるため、外国人緊急外来を受診したので、結構優先的に扱われ、楽であった。また幸い顔面の負傷の割に軽傷であったため、2日間通院しただけで済んだが、この間、初診料を含め、はじめは診療費500元(8750円)次の日が300元(5250円)、CT撮影が1200元(2万1000円)、薬代が抗生物質を含め7日分で290元(5000円)合計で4万円であった。これが高いか安いかはともかく、どうやら日本並みではないだろうか。日中友好病院はすでに述べたとおり、今や中国における基準病院の1つであり、そこに多くの医師を送り込んでいる今回訪日した中国医科大学生の報告に基づき報告すると、中国医療の改善すべき医療環境とし

て上げるのは、①医師の待遇が悪い、②仕事量が多い、③医学教育の時間が長い、④医師と患者の関係が悪い、その結果人材の流失が多く見られる。

その解決の方途として、あげられるのは、①医療保険の充実、②分級医療の徹底、今は三級の大病院に患者が集中するのを緩和する措置を採ること、③医薬関係の改革、医薬関係から生じる腐敗の除去、薬価の割高、薬価を以て医療費を補完することは正、④末端病院の改善、その能力の向上、医師待遇の向上、⑤インターネット医療の導入、これは広大な中国の末端まで進んだ医療が行き届くために必要、⑥医療環境の改善、即ち医師と患者の関係改善、医薬関係の改善、⑦老年医療の充実、をあげている。

5. 中国の医学教育（中国医科大学を例として）

中国医科大学の医学教育は5年制、6年制、7年制のうち現在は7年制が殆どなく、今回訪日した学生は8年制の5年生である。医学生が多すぎるといふ学生の指摘があるが、同大学では1学年2000人、しかし、ここで注意すべきは下表の2017年の同大学の学生募集内容

表 中国医科大学2017年の学生募集計画数

専門科目	学生合計数	学制	学位分類	備考
合計	1993	—	—	
臨床医学（5+3一体化）	150	5+3医	医学	
臨床医学（5+3一体化） （小児科は修士）	30	5+3	医学	
臨床医学（実験班）	30	5+研究生 育成	医学	
臨床医学	556	5	医学	
小児科学	50	5	医学	
麻酔学	60	5	医学	
眼視工学	30	5	医学	
精神医学	30	5	医学	
医学影像学	60	5	医学	
口腔医学	60	5	医学	
予防医学	90	5	医学	
臨床薬学	120	5	医学	
法医学	62	5	医学	
基礎医学	30	5	医学	
生物科学	60	4	理学	
生物医学工程	90	4	工学	
医学検査試験技術	32	4	理学	
医学影像技術	32	4	理学	
リハビリテーション治療学	59	4	理学	
看護学	180	4	理学	
情報管理と情報システム	32	4	管理学	
公共事業管理	30	4	管理学	
薬物製剤（中外協力）	60	4	理学	
生物技術（中外協力）	60	4	理学	
医学学位の取得資格数	1,238			
その他、理学、工学、 管理学学位取得資格者	755			

であり、そこには基礎医学部、臨床医学部、公衆衛生医学部、薬学部、口腔医学部、その他に分けられる。さらにこの約2000人の募集人員の内、約28・75%を占める4年制学部で学位分類でいくと殆どが理学部、工学部及び管理学部が占める。この4年制を卒業した学生は直ちに医療に携わることはできない。しかし、医療関連業務には従事できる。また短期の研修を受けて、医師試験を受けることもできる。医師試験は全国統一試験であ

る。従って、いわゆる医学に直結する学科の学生数は1238人である。これでも決して1大学としては少ない人数ではない。5年制の医学部を卒業した場合はそれだけでは医師にはなれない。さらに3年の研修が必要であり、その間に医師試験に合格する必要がある。従って実質的には全員が5年+3年の医学部に移行しつつあるといえる。

各学年の教科段階は1年生ではコンピューター、医学物理学、化学等、2、3年生

は生理学、生化学、免疫学、微生物学等、4年生は診断学、産婦人科、内科学、外科学、小児科学等、5年生になってから実習に入る。臨床医学の5年制を卒業した後、各科医局に入って、研修を続ける。この辺は日本と大差ないようである。募集表の中にある小児科等科名が明記されて募集している科に応募する学生は、応募する時点で将来従事する科が明確な者が応募し、卒業後は研究生になるか医療業務に従事することができ、医師資格を得るために試験に合格する必要がある。その間には大きな差はない。

他方表にある臨床医学5年生（556人）の学生の大半は卒業後3年の学習を実施する。

こうした同大学の医学教育について、学生たちの意見は医学生の数が多すぎることに、授業料が安価である。5年生以下は年額40000円、5年生以上は1万円である。

6. 今回の訪中国の訪問先との交流

11/27 まず千葉大学医学部及び附属医院は本千葉にあって、JRの駅からバス便がある。往路はそこをもっと近いと思いきだしたが、思ったより時間がか

かり、古い医学部への道を歩くことを余儀なくされた。若干遠回りとなったが、後の説明では現在は図書館として使用しているとの由である。お蔭で新旧の医学部に触れることができた。新しい附属病院と医学部の建物は近代的建造物が聳え立っており、中に入ると出迎えの長尾課長から、その場所が最近のTV番組の「Dr.X・私、失敗しないので」の病院場面との説明があり、中国学生たちもそれを知っており、そのTVをユーチューブでよく見るとのことであった。時間が来て、病院の2階の奥の広い教室に通されると横手副院長及び白澤教授をはじめ医学部の幹部職員の方々が大勢で出迎えてくれた。最初に横手副院長から歓迎の辞の後、新館説明と本病院の歴史と機能について述べられ、特に歴史では千葉大学医学部が日本の国立医専の最後のものであり、その次が中国医科大学の前身の1つである南満州医科大学が設立されたのであり、同校に対しては千葉大学医学部としては特別な兄貴分としての感慨があるという。次いで白澤教授（医学薬学部長）から、同学部の学生制度について、また日本の医療保険制度について話され、さらに、同医学部が千葉県はじめ、関東近辺の有力病院として、近隣都市の医師

の研修を不断に行い、地域医療の発展に貢献している旨強調した。昼食を挿んで午後は精巧な複数の人体模型による学生及び地域医師の研修現場の見学、リハビリ現場、透析現場を見学した。

11/28 東京河田町にある東京女子医科大学を見学した。この女子医大も中国医科大学との交流協定を結んでおり、毎年数名の学生が短期の相互交流を実施している。清水教授から大学の歴史、現状の説明があり、昼食時には日中学生が集まって食事を摂った。その中には2018年の1月から4月にかけて、相互交流する学生達がお互いに紹介し、また、中国医科大学の日本語教育グループを卒業し、日本の医師国家試験に合格、同女子医科大学で糖尿病専門医として働いている女医の方も参加して、楽しいひと時を送った。午後は同女子医大の先端研究、とりわけ早大との共同研究棟を見学し、患者の骨格筋細胞による心筋シートの培養等、新技術開発、ロボットによる診断技術の開発等の説明があった。

11/29 午前中は小田急線秦野にあるテルモメディカルプラネクスを訪問し、とくに心筋シートの製造については東京女子医科大学と協力していることがここでも説明された。

テルモ社はもと水銀体温計の製造から医療機器に足を踏み入れ、現在では医療機器の外、手術器具、ベッド等から先端医療技術に及んでいる。

午後は信濃町の慶應義塾大学医学部を訪問した。ここでは慶應義塾大学医学部に古くから設置されている慶應義塾大学日中医学交流協会の学生を交えて、交流した。まず、小児科の教授の山岸先生から、医学部の歴史について講義を受け、次いで医学部5年生学生代表から、医学部学生の学生生活実態について、詳細な興味ある内容が語られ、その後、日中學生が混成して2組に分かれ、今後日中で予想される疾病を選択し、それに対する意見交換がなされた。その後小児病棟の見学と説明、5時から日中医学交流協会顧問の深川医師主催の夕食会が病院前の居酒屋でひらかれ、総勢40人が集まり、交流が行われた。

11/30 午前八王子のオリンピック技術歴史館瑞古洞を見学した。ここは写真機から出発し、内視鏡へと発展した過程が詳しく展示され、中国學生が2組に分かれ、詳しい説明を聞き、有益な一時を過ごした。ここで団長の劉佳氏が中国公務員の出張期間5日間の期限が来たため、1人で八王子をはなれ、成田空港から、

帰国した。残りの11人は同行者とともに新橋の当協会を訪れ、会員との交流会に臨んだ。初めに副団長格の蔣術一院長兼附属病院医師が挨拶され、矢野会長から歓迎の挨拶、修了証書の授与、引き続き中国學生から、最近の中国の医療事情、中国医科大学の教育体制の説明、質疑応答を実施した。その後、交流パーティーでは和やかな雰囲気の中で交流が進められた。

12/1 午前は日本橋にある第一三共(株)のくすりミュージアムを見学、午後は大森の東邦大学医療センター大森病院を訪問し、感染症の専門医である館田教授から講義を受け、同医科大学の歴史、現況について、説明され、とくに同病院が東京の玄関である羽田空港に近く、感染症対策に重点を置き、海外からの感染症の防波堤の役割を果たしている。そして、

12/2 無事に羽田から帰国した。以上が1週間滞在中の活動内容である。

結びに変えて

前回は湖南大学工業設計芸術学院に30年以上前に千葉大学吉岡教授が工業設計の大学院課程を設置した経緯から、当時の記憶が両校に残っており、多くの関係

者がそれを懐古する中で楽しく、効果ある交流ができた。今回もかつてJICAが10年にわたって日中医学研修センターとその後継プロジェクトを展開し、大きな効果を上げた。その懐古を再現すべく期待を膨らませていたところ、同大学が最近キャンパスを移転したこともあって、17年前に終了した10年間の協力の痕跡も残っていないようであり、一時大いに落胆したのであったが、来日してみれば同医科大学は多くの日本の医科大学と交流協定を結び、大いに交流を実施してきたことが判明、逆に喜んだものである。最近も順天堂大学医学部と交流協定を結び、再来日を果たしている。

17年前に終了した同大学とのJICA協力事業はキャンパスの移転もあって、今回の参加者もそうした協力は知らなかったが、しかし、既に述べたように本医科大学がもっとも多数の日本の医学系大学との間で協力協定を締結していることは10年間の日本政府の協力のひとつの結果でもあらうことが実感できた。